

梅の春

土田龍太郎

先つころ花咲きそむる梅が枝の見まくほしさに湯島天満宮に詣でしことあり。をりしもかの境内、試験合格せちに祈願せましとて若きものども群集しゐたりしかば、いとにぎははしかりしはさることなれども、わがごとくだ梅見がてらに詣でし老い人また少からざりけむかし。

白梅や春まちかけし宮参り

新曆二月半ばを過ぎていまだほどなれば、春めけるけしきさまでしるからず。かの社の池のほとりにあまた立てる紅梅白梅の枝、おほかたはつばみばかりにて、ややほころべるものたえてなきにしもあらねどもわづかなれば、吹く風の香に匂ふほどのことだになくてやみにしこそげにあいなかりしか。

やうやう日數経て後、彌生の初つ方にてもやありけむ、たそがれ時に白山小石川わたりの車のしげく行きかよふ大路のほとりをそぞろにさまよひありきたるに、なにとやらむふとなつかしく薫れるものあり。しばし佇みてたしかむれば、これげに梅の匂へるにまぎれなし。うちおどろかるるままに、香の出でどころのとめまほしくて四方をながめやれども、目に入るかぎりの木草いまだ冬枯れしままなれば、いづこに梅の片枝だにあらむともさらに知られざるはいとすさまじし。はるかをち方に咲ける梅が枝の薫りのみ、風は吹かねどおのづから空より傳ひて漂ひ來れるにてぞあるらしき。あやしきいぶかしきことなのめならねど、これさへまたつねよりはおそき春の訪るるきざしにほかなければ、喜ばしからずやはあるべき。

花やいづこ香にのみしるき梅の春

(平成三十一年三月三十一日受附)